

漢文訓読の原理と読解法

- 1 はじめに
- 2 日本人と漢字
- 3 漢文訓読法の原理
- 4 漢文の基本構造と文法概念の定義
- 5 訓読の方法（１）－返り点
- 6 訓読の方法（２）－送り仮名と訓読文法
- 7 基本的な構文分析（１）
- 8 基本的な構文分析（２）

参考文献ほか

1 はじめに

東アジア地域は漢字・漢文文化圏と称されることがある。東アジア地域は、かつておたがいの意思伝達の手段として、書き言葉である漢字・漢文を共有し、それによって中国で生まれた儒教・律令制度・漢訳仏教などの諸文化を受け入れてきた。これはヨーロッパに於けるラテン語の存在に相当する。すなわち、ヨーロッパ、東アジア地域は「二言語併用（diglossia）」状態にあり、ラテン語や漢字・漢文が「聖語（hieroglossia）」として公的な場所で用いられ、政治権力と結びつき、また、文学、宗教、哲学の經典の言語として長い期間にわたって安定して機能していたのである¹。

ところで、表語（表意）文字である漢字による表記は、その流通地域内における音声言語の統一を前提としない。これは表音文字が「音声に密着した形で用いられる表記であるために、その表記を流通させようとする範囲内では、音声言語が統一されていることが前提となるし、あるいはそれが実現していないのであれば、音声言語とは異なる形での規範的な文法を用いなければならない」²ことに比べると、書き言葉としての漢字・漢文の大きな利点と認めることができる。

このような書き言葉としての漢字・漢文が東アジア地域で「聖語」として共有されていたのである。

なお、ここでは「漢文」ということばを中国古典語、古代漢語、すなわち、「周漢の言語、厳密に言えば春秋末より前漢にいたる言語をその規範とするもの」³という意味で用いている。したがって、日本で書かれた漢文を指す場合は「日本漢文」「変体漢文」ということばを用いる。

2 日本人と漢字

さて、日本への本格的な漢字の受容は 5 世紀ごろと考えられている。そして、7 世紀以降、多くの仏典・漢籍がもたらされることに伴って、これらの典籍を解釈・研究することが日本の学問の主流となっていくが、ここでは最初に日本人が漢文を自由に読み、書けるよう

¹ 村田雄二郎・C ラマール編『漢字圏の近代』（東京大学出版会 2005）34 頁

² 「《座談会》言語資源としての日本語」（『文学』2011 5・6 月号 岩波書店）12 頁 矢田勉の発言。

³ 太田辰夫『中国古典文法 改訂版』（汲古書院 1984）

になり、また、訓読という漢文を読み解くための翻訳技術が発達した歴史を知るために日本人と漢字の出会いから話をはじめ。

中国大陸の周辺地域に位置し、文字をもたなかった日本人が中国の漢字に出会ったのは、いまから千数百年以上も前の弥生時代のこととされている。

たとえば、中国、「新」朝が天鳳元年（14）に鑄造した貨幣「貨泉」が西日本各地より出土し、福岡市志賀島からは「漢委奴国王」の文字を刻んだ金印（写真右）も出土している。とくに、この金印は『後漢書』東夷列伝に記述されている「印綬」と一致するものではないかと考えられている。これらの考古資料より、われわれは日本人と漢字の出会いの一端を知ることができる。



漢字との出会いを繰り返すうちに、日本人は異国の文字である漢字を自分たちのことばを書き表す文字として（必然的に）借りることになった。もとより漢字は日本語のために造られた文字ではない。そこで、異国の文字である漢字を借り、用いるためには、試行錯誤を重ねながら、さまざまな工夫がなされたと想像される。しかし、この漢字との出会いから自分たちの文字とするまでの歴史的な経過やさまざまな工夫についてはわずかな資料があるだけで、その詳細は明らかにはなっていない。



そのわずかな資料のなかで現存する最古の金石文資料として、奈良県天理市石上神宮に伝わる「七支刀」がある（写真左）。そこには朝鮮半島で書かれた六十一文字の漢字が刻まれている。『日本書紀』神功皇后摂政紀には、364年に倭国の軍隊が海を渡って朝鮮半島の新羅の軍を破り、百済にその占領地を与えたため、372年、百済の王が大和朝廷に忠誠を誓って七枝刀（ななつさやのたち）・七子鏡（ななつこのかがみ）を贈ったと記されており、この七枝刀が「七支刀」と考えられている。銘文に見られる「泰和四年」は中国、東晋の「泰和四年（369）」（正しくは「太和四年」）と考えられており、百済が東晋より下賜された刀を模して、日本へ送ったと考える研究者もいる。

一方、日本で書かれた金石文には、稲荷山古墳出土鉄剣銘（471）、江田船山古墳出土太刀銘（五世紀半）、隅田八幡宮人物画像鏡銘（443or503）がある。

稲荷山古墳出土鉄剣（埼玉県行田市）には剣身の表に五十七文字、裏に五十八文字が金象嵌されている（写真右）。銘文冒頭には「辛亥年」とあり、また、文中の「獲加多支鹵」が雄略天皇であると考えられることから、作成年は471年が有力である。銘文中の固有名詞は現在確認できる最古の日本語表記である。

江田船山古墳出土太刀（熊本県玉名郡和水町）には太刀の棟に銀象嵌で銘文が刻まれているが、判読しにくい部分もあり文字数は七十五ないし七十六文字と考えられている。銘文の筆者は「張安」とあり、その名前から渡来人であろうと推測されている。



隅田八幡宮人物画像鏡（和歌山県橋本市隅田町）にはその外縁に四十八文字からなる銘文が刻まれている（写真左）。銘文冒頭に「癸未年」とあり、制作年は443年もしくは503年の二説がある。鏡の制作者は「開中費直」とあり、百済系の渡来人である。

これらの銘文の書き手は大陸、朝鮮からの渡来人と推測され、いまだ日本人が書き手として現れるには至っていないが、これらは日本で書かれた最古の金石文として重要な位置を占めている。

文献資料では『古事記』『日本書紀』に応神天皇のときに百済から阿直岐や王仁が来日し、『論語』などの中国書籍が贈られた記述がある。『日本書紀』には『論語』などの中国書籍が贈られたことについては記述がないが、『古事記』には「賢者を献上せよ」との天皇の命により、百済の国王が和邇（王仁とも表記する）に『論語』『千字文』を持たせたとあり、その和邇は太子の師となり、さまざまな漢籍を教えたと記されている。『古事記』『日本書紀』では応神天皇十五年から十六年（284～285）の出来事とするが、現在の研究では、実際は5世紀初頭のころと考えられている。また、『日本書紀』によれば、継体天皇七年（513）に百済より五経博士段楊爾が来朝し、欽明天皇十三年（552）には百済の賢明王が仏像と経論を献上したと記されている。

このように遅くとも5世紀から6世紀にかけて、朝鮮半島からの渡来人の指導のもとに上級階級を形成する識字層の人々によって漢字・漢文の学習がはじめられていたことがわかる。

それでは、古代の日本人は漢字・漢文をどのように使っていたか。彼らは、最初、現在の私たちが英語などの外国語を学習するように、漢字・漢文を音読（直読）していた。しかし、次第に漢字が〈音〉（漢字の発音）と〈意味〉を兼ね備えた文字であることに着目するようになり、彼らは漢字によって自分たちのことば（和語、やまとことば）を書き表そうと試みはじめた。

まず、漢字がもつ〈音〉に着目した。彼らは漢字の〈音〉を借りて、日本語を書き表すこと、〈音読み〉を試みた。たとえば、和語の「やま」を表記するために、「夜」という漢字の音を借りて「や」を、「麻」という漢字の音を借りて「ま」を、というようにして「夜麻」と表記した。

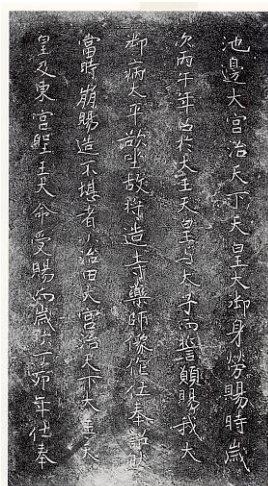
この表記方法は日本人が考え出した独自の方法ではなく、中国でも古くから用いられた、すでにある漢字を借りて別の語を書き表す〈仮借〉という表記法の応用である。そして、この表記方法が定着し、漢字が日本語を書き表すための文字になった。これが〈万葉仮名〉のはじまりである。

ある一字の漢字が本来もっていた意味を捨て、その音だけを借りて、一音節もしくは二音節の和語を書き表すのである。

また、漢字の〈意味〉にも着目した。彼らは表意文字である漢字がもっている中国語としての〈意味〉に相当する和語の読みを漢字にあてること、〈訓読み〉を試みた。たとえば、「山」という漢字を受け入れるときに「サン」という中国音も受け入れたが、そのときにあわせて「山」を意味する和語をあてて、「やま」と読むようになった。

ある漢字が本来もっていた意味に同じか、近い和語をあてて書き表すのである。

ところで、漢字によって書き表される中国語と〈訓〉として用いられる日本語とは、もともと相異なる言語であるため、一つ一つの語の意味が完全に一致するわけではない。漢字は、その一語一語に細かい意味の区別があり、語彙も豊富である。しかも、日本語は、中国語に比べると、意味の区別はおおまかで、語彙も中国語より少ない。そこで、日本語では一つ一つ意味を異にする漢字に対応することができず、併せて、一つの漢字に対する訓読みが「定訓」として一つの方向へ向かったため、似た意味を表す漢字を同じ日本語で読むという現象が起きた。たとえば、「合」「会」「逢」「遭」「遇」が「あう」と訓読みされ、「収」「修」「治」「納」が「おさめる」と訓読みされるのがその例である。このような漢字を〈同訓異義〉と言い、日本語における漢字の使い方を難しくしている原因の一つに

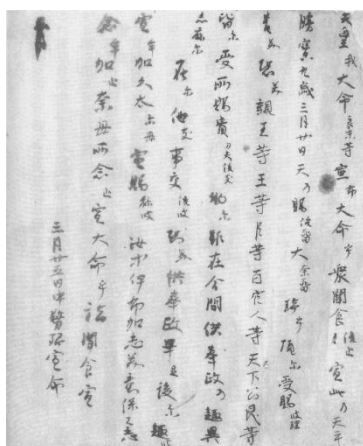


なっている。

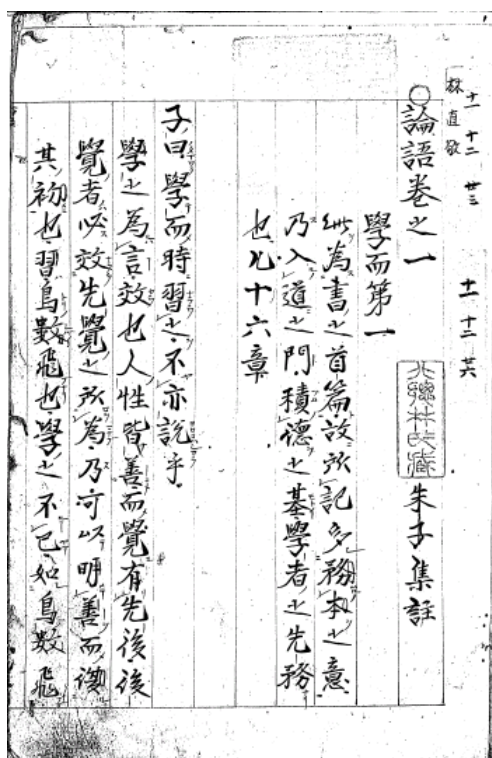
日本人はこのようにして漢字の〈音〉と〈訓〉を利用して自分たちのことばを書き表そうとしたが、彼らが書いた最も古い文章のひとつが法隆寺金堂薬師仏の「光背銘」である（写真前頁）。この文章が書かれた時期は、「天皇」という言葉が使われていることから 7 世紀後半と考えられている。「光背銘」は一見すると漢字だけの中国語の文章（漢文）のようだが、その多くが日本語の語順で書かれ、敬語表現も見られる。このような文体を「変体漢文」と言う。

また、群馬県にある「山ノ上碑」（写真右）は天智天皇十年（681）建立で完存する日本最古の石碑だが、この碑文は漢字を用いてほぼ日本語の語順で書かれている。

これらの用例はまだ日本語の形態論 morphology 的特徴である活用語尾や助詞・助動詞などの表記は見られないが、次第にこれらの要素を書き表すことに関心が向かっていったようである。つぎの「正倉院文書天平勝宝九歳瑞字宣命」（写真左）は助詞などを万葉仮名で書き示す「宣命体」とよばれる文体である。「宣命」とは「読み上げる天皇の命令」の意味だが、ここでは助詞などの送り仮名が万葉仮名の小字で書き示している（宣命小字体）。



3 漢文訓読の原理



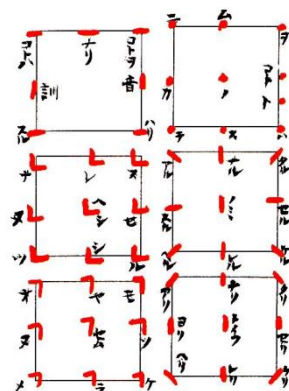
ところで、日本人が漢字で日本語の文章を書きはじめたころ、彼らはまた、この〈音読み〉と〈訓読み〉を利用し、さらにさまざまな工夫を加えながら、中国語や中国語に翻訳された仏教經典の文章を読み解くことを試みた。これが日本に於ける漢文訓読のはじまりである。

古典中国語として書かれた文章である漢文を日本語の統辞論 syntax に従って読む漢文訓読は、英語などの外国語から日本語への翻訳が原文から離れた翻訳文を作るのに対して、漢字だけで表記された原文をその漢字から離れずそれを可能な限り残す。そして、日本語の語順に従い、また、日本語の形態論 morphology 的特徴である活用語尾や助詞・助動詞を補って読みすすめる、漢字と仮名の混じった日本語に直してその意味を理解するという特徴を有する。言い換えれば、漢字を共有しながらも日本語と文構造の異なる中国語をどのように読めば日本語になるかという観点から、日本人が長い年月をかけて苦心して編み出してきた翻訳技術である。

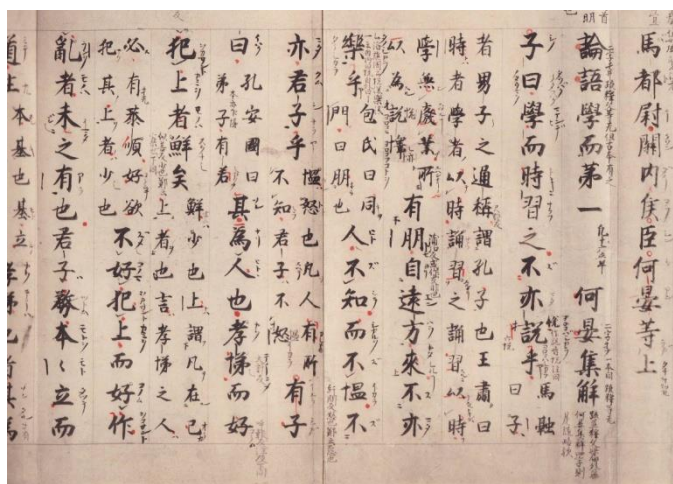
漢文を訓読する際、2つの段階を経て翻訳が行われる。最初に日本語の統辞論 syntax の特徴である SOV 構造と古典中国語の SVO 構造との違いや「否定詞＋述語」構造、「前置詞＋目的語」構造などを処理するため、原文に対して左下に「返り点」と呼ばれる日本語に即した語順を示す符号を書き加える。これは日本語と異なる文構造を日本語の文構造へ変換するといった統辞論 syntax に関する情報を示している。例に挙げた朱子『論語集注』（写真前頁）によれば、「返り点」としてレ点や一・二点が用いられている。

つぎに日本語の形態論 morphology の特徴である活用語尾や助詞・助動詞を補うため、原文に対して右下に「送り仮名」を片仮名によって表記する。なお、必要とされる場合、漢字の読み仮名も表記される。また、近世以降、「送り仮名」は片仮名表記が主流となるが、それ以前に於いては「ヲコト点」（写真右・右下）と呼ばれる点を漢字の周囲に施すことで「送り仮名」の代わりとしていた。

このように原文に対して左側には統辞論 syntax に関する情報が、また右側には形態論 morphology に関する情報が書き入れられているのである。そして、これら2つの段階で施された情報にもとづき、原文を読むこと、すなわち「読み下す」ことが漢文訓読である。



本稿に於いては以上の2つの段階をたどることが漢文訓読の原理・方法を理解する最善の方法と考え、まず古典中国語の基本構造の説明からはじめる。中国古典語の基本構造を理解することにより、「返り点」の必要性やこの符号を施す位置が理解できるであろう。つぎに訓読文法について概説する。訓読文法は古典文法に基づくことを規範とするが、奈良期より江戸期に至る時代ごとの日本語文法の影響が残っているために体系化することがむずかしい。



そこで、ここではとくに古典文法との「ずれ」（相違点）に着目して、その「ずれ」について解説を加えることにより、訓読文法の全体像を少しでも明らかにしたいと考えている。なお、漢文訓読が古典文法を規範としてきたことについては日本国内で江戸期に至るまで音声言語の統一がなされていなかったことと関係がある。この点について矢田勉は近世、候文に於ける漢文性について「江戸時代、基本的には藩ごとに地方政権がばらばらに存在するような社会の中で、音声言語の統一はなされていなかった」が「それにも拘わらず、全国に普遍的に流通させようという有益性があった」⁴という発言が参考になる。すなわち、音声言語の統一がなされていないため、音声言語とは異なる形での規範的な文法を用いなければならない必要性があり、その規範的な文法として古典文法が用いられてきたのである。このような状況は和歌や俳句に於いても基本的に変わりはないであろう。

⁴ 前掲「《座談会》言語資源としての日本語」

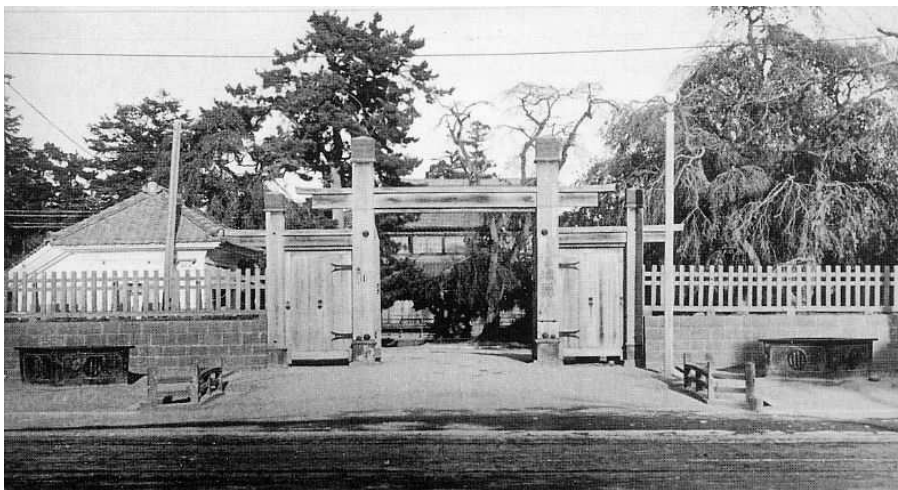
4 漢文の基本構造と文法概念の定義

漢文の言語学的特質は孤立語（isolating language）と言われる点にある。膠着語（agglutinative language）である日本語や屈折語（inflectional language）である欧米諸言語と異なり、語形変化がない。つまり、主語となっても述語となっても漢字そのものは同じ形のままである。そこで、重要となるのが〈語順〉であり、文の中での〈語順〉がその漢字のはたらきを決定する。

ここでは漢文の基本構造を楊伯峻『文言文法』（中華書局 1983）、太田辰夫 1984、濱口富士雄『改訂版 漢文語法の基礎』（東豊書店 2004）、濱口富士雄「漢文読解の基礎」⁵などの古漢語（漢文）の文法書にもとづいて「主語＋述語＋目的語」構造と考え、また、そこから導き出される「主語＋述語」構造および「述語＋目的語」構造を含んだつぎの三種類に漢文は還元される。

主語＋述語＋目的語
主語＋述語
述語＋目的語

主語、述語、目的語、補語という文の主要成分について、濱口富士雄 2004、2011 の定義を採用している。この定義において特徴的なことは、目的語の範囲を広く設定していること、すなわち、英語では「主語＋述語＋補語」として認定される文構造も、ここでは「主語＋述語＋目的語」として認定する点である。言い換えれば、このことは補語の認定をできる限り狭く設定していることを意味するが、研究者によっては春秋・戦国時代の語法状況を根拠として、文成分として補語を立てない語法説（易孟醇『先秦語法』 湖南教育出版社 1989）も存在する。



写真：江戸時代の藩校
仙台 養賢堂（大正期）

⁵ 『漢辞海 第3版』所収（三省堂 2011）

【二字熟語の構造】

二字熟語の構造は、つぎのとおりである。

- | | |
|-------------------------|----------|
| ①同じような意味の漢字を重ねた熟語 | 「岩石・尊敬」 |
| ②反対または対応の意味を表す漢字を重ねた熟語 | 「強弱」「男女」 |
| ③上の漢字が下の漢字を修飾している熟語 | 「温水」「実行」 |
| ④主語・述語の関係になっている熟語 | 「国立」「日照」 |
| ⑤熟語・目的語の関係になっている熟語 | 「握手」「着席」 |
| ⑥上の漢字が下の漢字の意味を打ち消している熟語 | 「不安」「非常」 |

問い 以下の熟語はどのような構造になっているかを答えなさい。

①吉報 ②賞罰 ③雷鳴

④消毒 ⑤不穩 ⑥携帯

⑦無限 ⑧駐車 ⑨是非

⑩日没 ⑪愛好 ⑫疾走

⑬未知 ⑭苦楽 ⑮親友

⑯地震 ⑰除去 ⑱遭難

【読解演習】

〈テキストの分析記号〉

A || B : 主語＋述語構造 A－B : 述語＋目的語構造 《於－A》 : 前置詞＋目的語構造

①花 || 開、鳥 || 啼。

〈現代語訳〉花が咲き、鳥が鳴く。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「啼」：動物が声を出して鳴く * 漢文は時間 (tense) を表すことばや語法が未発達なため、それぞれの文脈に応じて未来形、現在形、過去形に訳さなければならない。

②野中兼山 || 土佐人。

〈現代語訳〉野中兼山は土佐の人である。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「野中兼山」：人名（江戸時代の人） 「土佐」：地名（現在の高知県）

③古人 || 惜一寸陰。

〈現代語訳〉昔の人はわずかな時間も大切にした。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「古人」：昔の人 「惜」：大切にすること 「一寸陰」：わずかな時間

④転一禍、為一福。

〈現代語訳〉災いにあっても、それをうまく処理してかえって幸せな結果が得られるようにする。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「転」：(状態などを) 変える 「為」：(他の状態に) 変える

⑤平氏 || 泊《于一壇ノ浦》。

〈現代語訳〉平氏の軍勢は壇ノ浦に船を停泊させた。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「平氏」：ここでは平家の軍勢を指す 「泊」：船を岸にとどめる 停泊する 「于」：場所・範囲を示す前置詞 「壇ノ浦」：地名

⑥良薬 || 苦《於一口》。

〈現代語訳〉よく効く薬は苦く飲みにくい。自分のためになる忠告は聞き入れにくいことのたとえ。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「良薬」：良い薬 「苦」：にがい 「於」：場所・範囲を示す前置詞

⑦田中 || 有一株。

〈現代語訳〉耕作地に木の切り株があった。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「田」：耕作地 田畑 「株」：木の切り株 この文は「存在主語（存在を確認する場所・範囲） || 述語（有・無）－目的語（実質上・意味上の主語）」の形の存在文であり、「～に～がある」と訳す。

⑧ 尽一人事、待一天命。

〈現代語訳〉 人としてやるべきことはやり、あとは運命にまかせる。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「尽」：(全力を) 出しきる 「人事」：人として行うべきこと 「天命」：(天から与えられた) 使命・運命

⑨ 歲月 || 〈不〉 待一人。

〈現代語訳〉 時の流れは人を待ってくれない。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「歲月」：年月、時の流れ 「不」：否定の副詞

⑩ 夫子 || 聖者 (与)。

〈現代語訳〉 先生は聖者ですか。

〈母語訳〉

〈漢文から日本語の語順へ〉

「夫子」：男子、先生に対する尊称 「与」：疑問の助詞



写真：江戸時代の藩校
飢肥藩（宮崎） 振徳堂

5 訓読の方法（1）－返り点

先に述べたように、漢文を訓読する際、2つの段階を経て翻訳が行われる。その2つの段階のうち、最初に行う処理が日本語の統辞論 syntax の特徴である SOV 構造と古典中国語の SVO 構造との違いなどを処理するため、原文に対して左下に「返り点」と呼ばれる日本語に即した語順を示す符号を書き加えることである。これは SVO 構造から SOV 構造への変換や「否定詞＋述語」構造、「前置詞＋目的語」構造など、日本語と異なる文構造を日本語の文構造へ変換するといった統辞論 syntax に関する情報を示している。

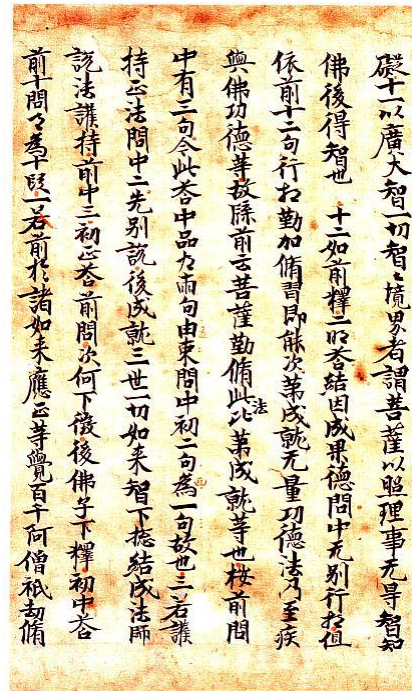
最も古い返り点が見られる奈良時代末の『華嚴刊定記』（写真右）という仏典は漢字の傍らに朱で一・二・三・四・五などの漢数字が見られる。ただ、『華嚴刊定記』は返読しないところにも漢数字が付されていることから、訓読する語順を示していると考えられている。

この『華嚴刊定記』ののち、平安初期（9世紀）になると、さまざまな記号が返り点として用いられるようになった。たとえば、返読する最初の漢字の傍らに「・」を書き添え、つぎに返読する最初の漢字とこれを受ける漢字の傍らにも「・」が書き添えられるようになった。記号は「・」のほか、「+」「○」「、」「」（かぎ括弧）などが用いられている。

平安中期（10世紀）になると、記号の返り点に代わって「上」「下」の字を用いるようになる。返読する最初の漢字の傍らに「上」を書き添え、これを受ける漢字の傍らに「下」を書き添える。この「上・下」点は、まもなく二度以上の返読においては「中」も加えて用いるようになった。

平安時代の終わり（11世紀）になると、返り点を施す量が次第に増えて、返読すべきところには返り点を施すようになり、そこで、一字だけ返読することを示す記号が必要となり、「レ」点が考案された。

「レ」点は鎌倉時代から一般に用いられるようになるが、最初は漢字と漢字との中央に記され、その形から「雁点（かりがねてん）」と呼ばれた。南北朝時代から室町時代初期にかけて、記す位置が左寄りに移り、桃山時代に現在の形に定着した。



【レ点のはたらき】

まず、レ点について説明をする。レ点は一文字前に返って読むことを示す記号であり、読む順序は「②→①」のようになる。たとえば、「登_レ山」はレ点を書き添えて「山に登る」と読む。

【一・二点などのはたらき】

文構造が複雑になれば、レ点だけでは訓読できない。そこで、レ点以外にもいくつかの返り点が考案された。一・二点、上・下点は二文字以上前に返って読むことを示す記号であり、読む順序は「③→①②→」のようになる。たとえば、「登_一富士山_二」は一・二点を書き添えて「富士山に登る」と読む。一・二点、上・下点は、一・二点を優先的に用いて、一・二点の範囲をはさんで、さらに下の字から上の字へ返るときには上・下点を用いる。

なお、「甲乙点」「天地点」という返り点もあるが、使用例が少なく、はたらきも一・二点や上・下点と同じなので省略する。

〇 上・下点	〇 一・二点	〇 レ点
〈漢文〉	〈漢文〉	〈漢文〉
見登富士山者↓見 _ル 登 _ニ 富士山 _ニ 者 _ヲ	登富士山に登る富士山↓登 _ニ 富士山 _ニ	登山に登る↓登 _ル 山 _ニ
〈日本語〉	〈日本語〉	〈日本語〉
富士山に登る者を見る	富士山に登る	山に登る

返り点のついた文の読み方は、原則として、返り点のつかない字を拾いながら上から下へ読み、最初に左上に「レ」、もしくは左下に「一」のついた字にきたら、その返り点のはたらきにしながら上に返り、また同じ方法で下にさがって読んでいく。

なお、レ点と一・二点、上・下点とが併用される場合があるが、その際には一点と上点とのみ併用し、二点や下点とは併用しない。

6 訓読の方法－送り仮名と訓読文法

日本語の形態論 **morphology** 的特徴である活用語尾や助詞・助動詞を補うため、原文に対して右下に「送り仮名」を片仮名によって表記する。この「送り仮名」の表記には古典文法に拠るが、この漢文訓読のための古典文法、すなわち訓読文法は時代とともに変化しており、それを網羅的に記述することはむずかしい。そこで、まず、現在の漢文訓読に於いて用いられている動詞、形容詞、助動詞をまとめれば、以下のようになる。

【動詞・形容詞】

- ①サ行変格活用 ②ラ行変格活用 ③四段活用 ④上一段活用 ⑤上二段活用
- ⑥下一段活用 ⑦下二段活用 ⑧形容詞の活用（ク活用・シク活用）
- ⑨形容動詞の活用（ナリ活用・タリ活用 ＊）

＊必ずしも独立した品詞として形容動詞を掲げる必要はない。

【助動詞】

- ①打ち消し「ず」 ②意志・推量「む」 ③使役「しむ」 ④受身「る・らる」
- ⑤当然・推量「べし」 ⑥比況「ごとし」 ⑦断定「なり」 ⑧断定「たり」
- ⑨完了「たり」 ⑩完了「り」 ⑪過去「き」

ところで、訓読に用いる文法は古典文法に準拠するが、その規則からずれたものがある。そのずれについては佐藤進「訓読のための日本語文法」⁶が主な説明を加えているので、ここではそれを補う程度にとどめることとする。

1：上代語文法の残存

（1）ク語法：この語法の語源については諸説あるが、活用語の連体形に「あく」という語が付いて、その母音が縮約されたとするのが、最も例外なく、一元的に説明し得る説と考えられ、そのため四段・ラ変・ラ変型の助動詞の未然形に「く」が付いた形、および上一・上二・下二段などの終止形に「らく」が付いた形の二形が生じたという。漢文訓読では、「いはく」「のたまはく」「おもへらく」「きくならく」のような形で文を導くものが多いが、このほかに係助詞「は」を伴って「ねがはくは」「こひねがはくは」「うたがはくは」のような形で副詞的に用いられることがある。

（2）確定条件を表す已然形の単独用法：「何為」の訓「なんすれぞ」は「なにすれぞ」の音便形であるが、本来、「なにすればぞ」と已然形に「ば」を付けていうところであるが、上代には「ば」を付けず、已然形単独で確定条件を表す用法があった。

（3）形容詞未然形語尾「け」：「無し」の未然形「無け」、「多し」の未然形「多け」および形容詞型活用の助動詞「べし」の未然形「べけ」が用いられる。

（4）助動詞「ゆ」「らゆ」の連体形：「所謂（いはゆる）」の「ゆる」は受身の助動詞「ゆ」の連体形が用いられている。

2：動詞

（1）サ行変格活用：漢語の動詞に対応する日本語「訓」がなく、その漢字音で読むとき、サ変「す」をつけて日本語の動詞にする。

⁶ 『漢辞海第3版』所収（三省堂 2011）

(2) ラ行変格活用：古典文法では「あり・をり・はべり・いまそかり」があるが、漢文訓読では「あり」一語のみである。「をり」は江戸期に四段活用化(「をる」)した。

(3) ナ行変格活用：古典文法では「死ぬ・往ぬ・去ぬ」があるが、漢文訓読では用いない。その代わりに「死す(サ変)」「往く(ユク 四段)」「去る(四段)」が用いられている。

(4) カ行変格活用：古典文法では「来」があるが、漢文訓読では用いない。平安中期以後は仮名文学では単独もしくは複合動詞の一部として広く用いられたが、漢文訓読の単独使用は平安中期以降その使用例が少なくなり、その代わりに「至る」と複合したラ行四段活用の「来たる(キタル)」が主として用いられた。

(5) 下一段活用：漢文訓読では「蹴る(下一段)」もしくは「蹴す(シュクス サ変)」と読むが、その用例はごくわずかである。

(6) 上一段活用：漢文訓読では「着る・射る・見る・率ゐる」などがある。本来は上一段活用でも漢文ではその活用が変化しているものに「干く(カク 四段)・試む(ココム 上二段)・居る(クル 四段)・用ふ(モフ 上二段)」がある。

3：形容詞

漢語の形容詞は日本語の形容詞として読むか、断定の助動詞「なり」「たり」を補って(形容動詞として)読む。

【参考】「なり」：「平安初期から用例はみられるが、前期はもっぱら漢文訓読文に限られる。…「なり」よりも印象的で、力強さがあり、漢文学習者の暗誦にも効果的であったところから次第に用いられ、またそれ故特殊な語として女性語文脈からは排せられたものらしい。「なり」が広く用いられるのに対して、院政期以後においても、漢文訓読や和漢混淆文に限られ、活用形も連体形に偏している。命令形の出現は時代がずっと下るようである。」(小学館『古語大辞典』)



写真：江戸時代の藩校
備中岡山 閑谷学校

4：助動詞

(1) 打ち消し「ず」：「不・弗」「未」の訓読に用いられる。

① 未然形「ず」：訓読では「ずんば」の形で用いられ、「…しなかったら」という意味の否定的な仮定条件となる。未然形「ず」に仮定条件を示す接続助詞「ば」がつき、撥音「ん」を添えて音便変化したものである。また、一説に、連用形の「ず」に強意の係助詞「は」がつき、音便変化したものとする。この場合は、「～（し）ないで」の意で、連用修飾法となる。

【参考】「ずは（ずば）」の語誌：万葉仮名の用字法や、キリシタン資料のローマ字表記 zuua や謡曲でのズワの発音などから考えて、「ずは」の「は」は、室町時代までは清音であった。このことから「は」を係助詞、「ず」を連用形とするのが通説であるが、「をば」の「ば」の例からも、清濁だけで係助詞か接続助詞かを決定することはできない。竹取物語に「焼けずはこそ」とあるが、係助詞なら「こそは」となるはずである。また古今和歌集では、副助詞「し」は「ば」で受ける条件句中に用いられるのが常であるが、「花し散らずは」などと用いられていることから、この「は」は「ば」と同じと考えられる。要するに、語源説としては係助詞でよかろうが、少なくとも平安初期には接続助詞化していたといえる。上代の用例も、接続助詞と考えて差し支えない。（小学館『古語大辞典』）

「ば」を接続詞と考えれば「ず」は未然形となり、係助詞と考えれば連用形となると解釈されるのである。古写本などでは濁音でも濁点を付けないことが普通であり、このことも混乱の一因となっている。

② 連用形「ず」：訓読では接続助詞「して」と接続した「ずして」の形で用いられる。訓読では「ずて」や打ち消しの接続助詞「で」は用いない。

③ 連体形「ぬ」・已然形「ね」：「ぬ」「ね」は訓読では用いず、その代わりに「ざる」「ざれ」を用いる。おもに「ぬ」「ね」は和文脈、「ざる」「ざれ」は漢文脈という使い分けがなされていた。

(2) 推量「む」：「将・且」「欲」などの訓読に用いられるほか、文脈に応じて補読する。終止形「む」・連体形「む」だけで、已然形「め」は用いない。なお、漢文訓読では「む」を「ん」と表記する。

(3) 使役「しむ」：「使・令」などの訓読に用いられるほか、文脈に応じて補読する。同じ使役の助動詞「す・さす」は用いられず、中古に於いては、漢文脈は「しむ」、和文脈は「す」「さす」という使い分けがなされていた。また、和文脈に於ける「しむ」の使用例は男性の会話などの場合に限られている。

(4) 受身「る・らる」：「見」「被」などの訓読に用いられるほか、文脈に応じて補読する。自発・可能・尊敬の用法はない。

(5) 当然・推量「べし」：「可」「当・応・須・宜」などの訓読に用いられる。

① 未然形「べけ」：奈良時代には「べし」の未然形に「べけ」があり、訓読では「べけんや」という反語の形で用いられている。なお、「無けん」も奈良時代の形容詞「なし」の未然形「なけ」が残ったものである。

② 未然形「べく」：「べくんば」の形のみで用いられる。一説に連用形「べく」に強意の係助詞「は」が接続して音便変化を起こしたものとする。

- ③ 已然形「べけれ」は用いない。
④ カリ活用未然形「べから」：「べからず」の形で用いられる。

(6) 比況「ごとし」：「如・若」「猶」などの訓読に用いる。訓読では未然形「ごとく」は用いず、その代わりに四段活用の動詞「しく」(匹敵する・及ぶ意)の未然形である「しか」を用いる。

(7) 断定「なり」：判断を示して、はっきり言い切る場合に用いる。漢語の「也」も判断を示して、はっきり言い切る場合に用いられるが、強い語気を表す場合なら、疑問・反語・詠嘆・命令にも用いる。なお、連用形「に」に接続助詞「て」「して」を接続する場合、「して」を用い、「て」は用いない。

(8) 断定「たり」：「為」の訓読に用いる。状態を示し、人の地位・資格を述べる場合や副詞を述語にする場合に用いる。

(9) 完了「たり」「り」：特定の文字を読むのでなく、文脈に応じて補読する。「り」は四段動詞の已然形、サ変動詞の未然形にのみ接続し、そのほかは「たり」を用いる。用例としては、中古に入ると和文脈では「り」より「たり」の方が盛んに用いられるが、漢文脈では逆に「り」の方が優勢となった。

5：助詞

(1) 接続助詞「ば」：本来、「已然形＋ば」は確定条件を表すが、漢文訓読では仮定条件の意味にも用いられる。この用法の背景には「已然形＋ば」に事柄の未定・既定に関係なく、普遍的、恒常的な真理を表現しようとする恒常条件の用法がある。「已然形＋ば」の確定条件機能は次第に弱まり、逆に仮定表現の用法が発達するようになり、近世後期江戸語に於いては従来の「已然形」はすでに「仮定形」と捉えることができるようになっている。

(2) 係助詞「は」：9世紀以前の日本語では主格や対格の助詞を伴わずに文章を読んでおり、主格についてはそれが漢文訓読に残存しており、主語には係助詞「は」を付けない。しかし、対比や人物紹介に限って係助詞「は」を送る。なお、目的語を示す格助詞「を」は、漢文訓読では一般的に目的語に「を」を伴うことの影響もあって、目的語に付けられるようになったという。平安初期に於いては漢文訓読でも「を」を伴わないものがある。

(3) 係助詞「ぞ・か」：漢文訓読では「なんぞ」や「いづくにか」のように係助詞「ぞ・か」に用いた疑問の係り結びがあり、その場合は文末を連体形で結ぶ。

(4) 副助詞「すら」：推測の副助詞「だに」「すら」「さへ」のうち、漢文訓読では「すら」を用いる。「すら」は奈良時代に用いられたが、平安時代には和歌に用いられ、散文の用例はあまりなく、平安末期から鎌倉時代にかけて再び用いられるようになった。

(5) 連語「をして」：和文では使役の対象を表す際に格助詞「して」を用いるが、漢文訓読では格助詞「を」を加えた「をして」を用いる。

【訓読演習】

①花 || 開、鳥 || 啼。

【訓読語法】①主語には格助詞「が」や係助詞「は」を送らない。②「開」はカ行四段活用（連用形）。③「啼」はカ行四段活用（終止形）。

②野中兼山 || 土佐人。

【訓読語法】①歴史書や伝記などで人物を紹介するときの主語は係助詞「は」を送る。②国名につく「人」は「ひと」と訓読みする。また、「土佐」は「人」を修飾するため、連体修飾語を示す格助詞「の」を補って「土佐の人」と訓読する。③この文は判断文なので断定の助動詞「なり」（終止形）を補って訓読している。【参考】断定の助動詞「なり」「なり／なり・に／なり／なる／なれ／〇」（体言または活用語の連体形に接続）

③古人 || 惜一寸陰。

【訓読語法】①「惜」はマ行四段活用（終止形）。②「一寸陰」は述語「惜しむ」の目的語であるので格助詞「を」を送る。

④転一禍、為一福。

【訓読語法】①「転」はサ行変格活用（連用形）。②「為」はサ行四段活用（終止形）。③述語「為す」の目的語「福」には変化の結果を表す格助詞「と」を送る。

⑤平氏 || 泊《于一壇ノ浦》。

【訓読語法】①「泊」はサ行変格活用（終止形）。②「于一壇ノ浦に」と格助詞「に」を送り、「于一壇ノ浦に」は不読（置き字）として処理する。古い読み方では「于一壇ノ浦に」を「于一壇ノ浦に」と訓読していた例がある。

⑥良薬 || 苦《於一口》。

【訓読語法】①述語「苦」は形容詞ク活用「にがし」（終止形）をあてて訓読する。②「於一口に」と格助詞「に」を送り、「於一口に」は不読（置き字）として処理する。古い読み方では「於一口に」を「于一口に」と訓読していた例がある。

⑦田中 || 有一株。

【訓読語法】①「田中有株」は存在文である。存在文「A 有 B」では主語 A には格助詞「に」を送り、目的語 B を実質上・意味上の主語と理解して格助詞「を」や「に」を送らず、「A に B 有り・無し」と訓読する。②「有」はラ行変格活用（終止形）。

⑧ 尽一人事、待一天命。

【訓読語法】①「尽」はサ行四段活用（連用形）。②「待」はタ行四段活用（終止形）。

⑨ 歲月 || 〈不〉 待一人。

【訓読文法】①「不」は打ち消しの助動詞「ず」（終止形）をあてて訓読する。②「待」はタ行四段活用（未然形）。

⑩ 夫子 || 聖者（与）。

【訓読文法】①ここでは主語の「夫子」に係助詞「は」を送る。②「与」は疑問の終助詞「か」をあてて、訓読する。体言および活用語の連体形に接続する。この文は判断文なので断定の助動詞「なり」を補った「聖者なり」の連体形「聖者なる」に「か」を接続させる。②を参照。

7 基本的な構文分析（1）

さきにも述べたが、「漢文の基本構造」は「主語＋述語＋目的語」構造であり、そこから導き出される「主語＋述語」構造および「述語＋目的語」構造を含んだ三種類に還元される。

そこで、つぎに漢文学習の入門期に習う機会が多い「守株」（『韓非子』）を例に、漢文の基本構文のいくつかについて説明する。

.....

A∥B：主語＋述語構造 A－B：述語＋目的語構造 A／B：並立構造 《於－A》：前置詞＋目的語構造 〈 〉：修飾語（形容詞・副詞・代名詞など 副詞化も含む）〔 〕：補語 { }：接続詞 ()：助詞 【 】：兼語 []：語句のまとまり 【漢語語法】：古典中国語としての語法説明 【訓読語法】：訓読法についての解説・句法 【参考】：助動詞の活用「未然形／連用形／終止形／連体形／已然形／命令形」（接続）など

漢字語彙とテキスト分析 「守株」

0 守一株

（題名）株を守る

守	シウ／シュ・ <u>まもる</u> 【四段】	○見守る 待つ
株	シュ・ <u>かぶ・くひぜ</u>	○木を切った後に残る根の部分
守株	シュシュ	○古い習慣にとらわれて、新しい時の流れが理解できないことのたとえ

1 〔〈宋〉人〕∥有－〔耕－田（者）〕。

宋の国のひとに田畑を耕すものがいた。

宋人	ソウひと	○宋の国のひと（ひと）
有	イウ／ウ・ <u>あり</u> 【ラ変】	○ある 存在する
耕	カウ・ <u>たがやす</u> 【四段】	○（田畑を）たがやす
田	テン／ <u>デン</u>	○耕作地 田畑
者	シャ・ <u>もの</u>	○文法機能（後述）

「宋人有耕田者」：

【漢語語法】①「存在主語（存在を確認する場所・範囲）∥述語（有・無）－目的語（実質上・意味上の主語）」の存在文である。（「多・少」などの形容詞を述語に持つ構文も存在文と同じように考える。）ここでの目的語は「述語＋目的語」構造に名詞句を構成する助詞「者」が添えられた「耕田者」である。②「者」は形容詞・動詞・述語＋目的語構造などに後置して、人物・事柄・状況・理由などを表す名詞句を構成する助詞である。

【訓読語法】①存在文「A有B」では主語Aには格助詞「に」を送り、目的語Bを実質上・

意味上の主語と理解して格助詞を送らず、「AにB有り・無し」と訓読する。②「者」は形式名詞「もの」をあてて訓読する。「宋人」：国名につく「人」は「ひと」と訓読みする。
○「宋人に田を耕す者有り。」

2 〔〈田〉中〕 〓 有一株。

田畑の中に木の切り株があった。

中 チウ・なか ○（～の）なかに

「田中有株」：

【漢語語法】存在文である。（「1 宋人有耕田者」に既出）

【訓読語法】「1 宋人有耕田者」（存在文）の訓読法を参照。

○「田中に株有り。」

.....

【解説】

ここでは存在文という構文が見られるが、「有」は存在・保有を表し、その区別がまぎらわしい。また、「有」を述語とする句では主語がないことがしばしばあり、動作・行為を發動するものをあまり意識しない語であるらしい（太田辰夫 1984）。漢文訓読においては、「有」が「あり」と訓読されるため、日本漢文、たとえば、『日本書紀』などで「在」と混用されることが有名である。つぎにその一例を挙げる。

是玉今有石上神宮。（『日本書紀』卷六 垂仁紀） → 〈是〉玉 〓 〈今〉在石上神宮。

この用例で「有」字が誤用である理由は、「存在主語（場所・範囲） 〓 述語（有・無） 一目的語（実質上・意味上の主語）」という存在文の構造を当てはめれば明らかであろう。もし、無理に「有」字を使うのであれば、「今石上神宮有是玉。」となるか。

一方、「在」字の用い方は、「主語（人・物） 〓 在 一目的語（場所）」という構文になるが、目的語には「於」などの前置詞を取らず、また、訓読するさいには場所を示す目的語に格助詞「に」を送る。

ところで、「有」字は、文法上、特徴のあるはたらきをする。

有一蒋氏（者）、専一（其）利〔三世〕（矣）。（柳宗元「捕蛇説」）

蒋氏なる者有り、其の利を専らにすること三世なり。

はじめてあらわれた話題が普通名詞もしくは固有名詞であるとき、それはしばしば「有…」の形で導き出す。この用例の「有」字のはたらきは、文章をゆったりと穏やかにすることであり、*rhetoric* のひとつである。ここでは「有蒋氏者」の形で導き出された「蒋氏者」がつぎの「専其利三世矣」の主語になっている。

また、この存在文に準じた構文を作るものに自然現象や出現などを表す現象文がある。たとえば、つぎのような用例が現象文である。

晴天（天、晴る）。 下雨（雨、下る）。

日本漢文において現象文は日本語の語順との混乱もしくは日本語化が多く見られ、たとえば藤原道長『御堂関白記』を例に挙げるとつぎのような用例がある。

「長保元年己亥」

霰降（霰アレ、降る）。 雨下。＊『後漢書』（光武帝紀上）に用例あり。

「寛弘元年甲辰」

雪下。 不天晴（天晴れず）。 天晴。

.....

3 兔 || 走／触一株、折一頸、{而} 死。

兔が走ってきて切り株にぶつかり、頸を折って死んでしまった。

兔	ト・うさぎ	○うさぎ
走	ソウ・はしる【四段】	○走る 走ってくる
触	ショク／ソク・ふる【下二段】	○触れる ぶつかる
折	セツ・をる【四段】	○折る
頸	ケイ／キャウ・くび	○首（の骨）
而	ジ／ニ・しこうして	○そして（後述）
死	シ（ス）・しぬ【サ変】	○いのちを失う

「兔走触株、折頸、而死」：

【漢語語法】①連動式の文である。漢文における特徴的な文であり、一つの主語のもとに二つ以上の述語が連用される。これは述語構造の単なる並列ではなく、同一主語のもとに時間の経過あるいは因果関係や目的などきわめて緊密な関係をもつ二つ以上の述語構造が記述された文である。それぞれの述語構造は、直接接続されるか、間に「而」「以」などの接続詞を介して接続される。ここでは時間の経過および因果関係を表す。②「而」は順接の接続詞であり、前の内容をそのまま受けて後の内容が展開する。

【訓読語法】①「走触…、折…、死」と述語動詞が連用されるとき、その動詞を連用形に活用させ、接続助詞「て」を補うことがある。とくに「走触…」のように二つの述語動詞を訓読するとき、最初の動詞に接続助詞「て」を補うことが多い。②「而」は「しかして」「しこうして」、または不読（置き字）として処理して直前の語に「…して」「…て」と送りがないをつけて訓読し、「そして」「それから」「そこで」などと訳す。

○「兔走りて株に触れ、頸を折りて死す。」

.....

【解説】

ここでは「置き字」という問題について述べることにする。「置き字」とは一般に「漢文にはあるが、訓読の都合上読まない文字」（学習参考書）と説明されるが、語学として漢文訓読を教えるという視点に立てば、かなり曖昧な用語である。現在の学校教育では「置き

字」すなわち不読として処理されるが、室町時代末から江戸時代にかけて、これらの漢字はしっかりと訓読されている方が多い。

たとえば、桂庵玄樹（1427～1508）は『桂庵和尚家法倭点』のなかで、京都東福寺の不二庵開山、不二道人（岐陽方秀 1361～1424）のことばを引用している。

文字読みをば、落字無き様に、唐音に読み度也。其の故は、偶たま一句半句、そらに覚ゆる時、をき字、其の何の字有ることを知らざる也。口惜しい哉。

『桂庵和尚家法倭点』より

桂庵の訓法は『家法倭点』によってその断片を知ることができるが、それは博士家伝来の訓法に拠りつつも、置き字をできるだけ読み表すとともに、博士家の特殊な訓読の読み方をその当時の日本語として通常の読み方に改めようとしている。桂庵の訓法はその後、代々受け継がれ、江戸時代初期、文之玄昌（1555～1620）によって「文之点」の形で現在に伝わっている。江戸時代になって「漢文作文」の練習法としての「復文」が盛んになったこともあり、「置き字」をなるべく少なくする、すなわち「字を落とさずに読む」という流れは続く。また、荻生徂徠や太宰春台などの古文辞学の影響などもあり、「置き字」すなわち助辞研究も盛んになり、すべての漢字を落字なく読もうとする幕末の佐藤一齋点に至った。現在の「置き字」処理のしかたは明治になってからのものであるが、多分に佐藤一齋点への反省もしくは反動から生まれていると考えられる。

このような歴史的経過もあり、いまさら「置き字」の善し悪しを論じて意味のないことであろう。それよりも大切なことはそのような「置き字」もテキストを読むさいには目で確認することができるということである。目で確認することによって、その漢字が持つはたらきを知ることが可能となり、それを翻訳に生かすことができるのである。言い換えれば「置き字」と呼ばれる助辞、すなわち古漢語文法という接続詞、前置詞、助詞のはたらきの理解が大切であるわけだが、従来の句法学習ではこの点への配慮がいささか欠けているように思われる。

.....

4 {因} 釈一 [〈其〉 未]、{而} 守一株、冀一 [〈復〉 得一 兔]。

そこで、そのすきを放り出して、その切り株を見守り、もう一度うさぎを手に入れたいと願った。

因	イン・ <u>よりて</u>	○そこで	すでに
釈	セキ／シャク・ <u>すつ</u> 【下二段】	○捨てる	放り出す
其	キ／ゴ・ <u>その</u>	○その	
未	ライ・ <u>すき</u>	○（農耕具の）すき	
冀	キ・ <u>こひねがふ</u> 【四段】	○願い望む	
復	フウ／ブ／フク・ <u>また</u>	○もう一度	
得	トク・ <u>う</u> 【下二段】	○手に入れる	

「因积其耒、而守株」：

【漢語語法】①「因」は接続詞である。重文（compound sentence）で、後の節（clause）のはじめに置き、その後の節の内容（「因积其耒、…」）が、前の節の行為や事情（「兔走触株、…」）と緊密に関わって、引き続き起こることを表す。②「而」は順接の接続詞である。（「3 兔走触株、折頸、而死」に既出）

【訓読語法】①「因」は「よりて」もしくは音便化した「よって」と訓読し、「そこで」「すでに」と訳す。②「而」は不読（置き字）として処理されている。「3 兔走触株、折頸、而死」の訓読法を参照。

○「因りて其の耒を积て、株を守り」

「冀復得免」：

【漢語語法】①「冀」は述語動詞として希望・願望の意味を表す。②「復」は副詞で、同一の動作・状況が再度くり返されることを表す。

【訓読語法】①「冀」は希望・願望の意味を表すため、活用語に接続するときは意志・推量の助動詞「ん（む）」＋形式名詞「こと」＋格助詞「を」を補い、「～んことを冀ふ」と訓読する。②「また」と訓読して、「もう一度」と訳す。

【参考】意志・推量の助動詞「む」の活用 「○／○／む／む／（め）／○」（活用語の未然形に接続）なお、漢文訓読では「ん」と表記される。

○「復た兔を得んことを冀ふ。」

5 兔 || 〈不〉可〈復〉得、{而} 身 || 為一 [〈宋国〉笑]。

うさぎは二度と手に入れることができず、その人は宋の国のひとたちから笑われた。

可	カ・ <u>べし</u>	○…できる（後述）
身	シン・ <u>み</u>	○自分自身
為	キ・ <u>なる</u> 【四段】	○…となる（後述）
宋国	<u>ソウコク</u>	○宋の国（のひとたち）
笑	セウ・ <u>わらひ</u>	○笑い 動詞の場合は【四段】。

「兔不可復得」：

【漢語語法】①「兔」がこの文の主語となるが、このように述語の動作行為をはたらきかけられる対象となる主語を「受事主語」という。②「可」は助動詞で可能を表す。客観的な状況や条件または能力において、可能なことを示す。③「復」は副詞で、同一の動作・状況が再度くり返されることを表す。（「4 冀復得免」に既出）

【訓読語法】①主語「兔」と次の文の主語「身」に係助詞「は」を補ってもよい。②助動詞「べし」で訓読し、「…できる」「…しうる」と訳す。③「復」は打ち消しの助動詞「不」とともに用いることが多く、「二度とは（前のようには）…しない（できない）」と訳す。

○「兔復た得べからずして」

「而身為宋国笑」：

【漢語語法】①「而」は順接の接続詞である。（既出）②「身為宋国笑」は受動（受け身）

文である。普通は「所」とともに「(主語) 為 (動作主 A) 所 (動作 B)」の構文を取り、「(主語) は (動作主 A) に (動作 B) される」という意味になるが、ここでは「所」字のない「(主語) 為 (動作主 A) (動作 B)」という古い語形である。

【訓読語法】②「(主語) 為 A 所 B」は「(主語) は A の B する所と為る」と訓読するが、「所」字がないときは「(主語) 為 AB」は「(主語) は A の B と為る」と訓読し、動作 B を名詞化する。なお、「為」を受け身の助動詞「る・らる」にあて、「身は宋国に笑はる」と訓読することもできる。

【参考】完了・存続の助動詞「り」の活用 「ら／り／り／る／れ／れ」(四段活用の已然形、サ変の未然形に接続)

○「身は宋国の笑ひと為れり。」

.....

【解説：訓読文法に見られる日本語の歴史】

訓読文法を注意深く見てみると、そこには日本語の変遷が垣間見えることがある。最後にそのなかから2つの問題について紹介する。

①打ち消し助動詞「ず」の未然形

打ち消し助動詞「ず」に未然形があるかどうかということも問題となる。これは「ずば」「ずんば」の「ば」を接続助詞と考えるか、係助詞と考えるかによって生じる問題である。すなわち、「ずば」「ずんば」の「ば」が接続助詞ならば打ち消し助動詞「ず」は未然形となり、係助詞ならば連用形となるのである。現在、語源説としては、「ずば」「ずんば」の「は」(「ば」は「は」の濁音化)を係助詞とする説が有力であり、そうであるならば打ち消し助動詞「ず」の連用形となる。しかし、少なくとも平安初期には「ば」が接続助詞化していたらしく、平安文法を規範とする訓読文法においては未然形と考えて差し支えないだろう。古写本などでは濁音でも濁点を付けないことが普通であり、このこともこの混乱の一因となっている。現在、ほとんどの古語辞典は未然形を認めるが、『岩波古語辞典』は未然形「ず」を認めていないこともこの問題を複雑にしている。やはり、2冊以上の辞書の併用が必要であろう。

②断定の助動詞「たり」「なり」の使い分け

漢文訓読のさいに、たとえば、「寂」を「寂たり」「寂として」のように漢字音で読むときには断定の助動詞「たり」の連用形「と」を用いるが、「寂」を「しづかなり」「しづかにして」と訓読みで読むときには断定の助動詞「なり」の連用形「に」が用いられる(なお、ここでは形容動詞と考える)。「たり」は平安初期から用例はみられるが、前期はもっぱら漢文訓読文に限られており、特殊な語として女性語文脈からは排せられていたらしい。

このような漢文脈と和文脈における使い分けは打ち消しの助動詞「ず」の連体形「ぬ」や已然形「ね」や使役の助動詞「す」「さす」を漢文訓読に於いては用いないことにも見られる。

なお、このような使い分けは語彙においても見られる。

8 基本的な構文分析（2）

.....

A || B: 主語＋述語構造 A－B: 述語＋目的語構造 A／B: 並立構造 《於－A》: 前置詞＋目的語構造 〈 〉: 修飾語（形容詞・副詞・代名詞など 副詞化も含む）〔 〕: 補語 { } : 接続詞 () : 助詞 【 】: 兼語 [] : 語句のまとまり 【漢語語法】: 古典中国語としての語法説明 【訓読語法】: 訓読法についての解説・句法 【参考】: 助動詞の活用「未然形／連用形／終止形／連体形／已然形／命令形」（接続）など

漢字語彙とテキスト分析 「此必苦李」

0 此 || 〈必〉 苦李。

（題名）これはきっと苦いスモモにちがいない。

此	シ・ <u>これ</u> ○これ
必	ヒツ・ <u>かならず</u> ○きっと 必ず…しなければならない
苦李	<u>クリ</u> ○にがいスモモ

1 王戎 || 七歳、|| 〈嘗〉《与一〈諸〉小兒》遊、|| 看〔〈道 辺〉李樹 || 多一子／折一枝〕。

王戎が七歳の時、いつも子供たちと遊んでいたが、（ある時）道ばたに実が多くみのり、まさに枝が折れそうなスモモの木を見た。

王戎	<u>ワウジュウ</u> ○人名 (wang2 rong2)
嘗	シャウ／ジャウ・ <u>かつて</u> ○かつて いつも
諸小兒	<u>ショセウニ</u> ○子供たち
遊	イウ／ユ・ <u>あそぶ</u> 【四段】 ○あそぶ
看	カン・ <u>みる</u> 【上一段】 ○みる
道辺	<u>ダウヘン</u> ○道ばた
李樹	<u>リジュ</u> ○スモモの木
多	タ・ <u>おおし</u> ○多い
子	シ・こ、(み) ○果実
折	セツ・ <u>おる</u> 【四段】 ○折る
枝	シ・ <u>えだ</u> ○木の枝

「王戎七歳」:

【漢語語法】名詞述語文（判断文）である。

【訓読語法】名詞「七歳」に「のとき」を補って訓読する。

「嘗与諸小兒遊」：

【漢語語法】①「嘗」は副詞で、「いつも」と訳す。②「与」は前置詞で、後ろに名詞や名詞句をとまって前置詞構造を構成し、いっしょに何かをする対象を表す。「と・とも」と訳す。③「諸」は形容詞で「多くの」の意味である。

【訓読語法】①「嘗」は「かつて」と訓読するが、行為や事件が以前にあったことを表す「これまでに」と「いつも」「つねに」の意味の二つがある。②「与」は「…と、…とともに」と訓読する。③「諸」は「もろもろの」と訓読することもできる。

「看道辺李樹多子折枝」：

【漢語語法】①「道辺」は「李樹」を修飾する。②「李樹多子折枝」は述語「看」の目的語である。

【訓読語法】①「道辺」に連体修飾語を示す格助詞「の」を送る。②「李樹多子折枝」の「李樹」は埋め込み文（複文）の主語であるため、主語を示す格助詞「の」を送る。また、「折る」には推量の意味を加えるために「…んとす」を補う。そして、それを目的語を示す格助詞「を」に接続させるために「…んとす」のサ変「す」を連体形「する」に活用させて「折らんとするを」と訓読する。

○「王戎七歳のとき、嘗て諸小兒と遊び、道辺の李樹の子多く枝を折らんとするを見る」

2 〈諸〉児 || 競／走／取一之、〈唯〉戎 || 〈不〉動。

子供たちは競い合うように走り寄ってスモモの実を取ったが、王戎だけは動かなかった。

競	ケイ／キャウ・ <u>きそふ</u> 【四段】	○たがいに負けないように張り合う
走	ソウ・ <u>はしる</u> 【四段】	○はしる
取	シュ・ <u>とる</u> 【四段】	○とる
之	シ・ <u>これ</u>	○これ（を・に）
唯	キ／ユイ・ <u>ただ</u>	○ただ…だけ
不	フ・ <u>ず</u>	○…ない
動	トウ／ドウ・ <u>うごく</u> 【四段】	○スモモの木

「諸児競走取之」：

【漢語語法】①主語「諸児」が「競」「走」「取」を述語に取る連動式の文である。②「之」は代名詞でスモモの実を指す。

【訓読語法】①「競ふ」は連用形に活用させて「走る」に接続する。「走る」は連用形に活用させて接続助詞「て」に接続する。「取る」は已然形に活用させて逆接の接続助詞「ども」につなげる。②「之」は目的語を示す格助詞「を」を送って「これを」と訓読する。

「唯戎不動」：

【漢語語法】①「唯」は限定を表す副詞として、動詞の前や文頭に置く。②「不」は否定の副詞である。

- 【訓読語法】①「唯」は「ただ…のみ」と限定の副助詞「のみ」を呼応させて訓読する。
 ②「不」は打ち消しの助動詞「ず」で訓読する。
 ○「諸兎競ひ走りて之を取れども、唯戎のみ動かず」

3 人 || 問之、答曰、樹 || 在道邊 {而} 多一子。此 || 必苦李。

ある人がこのことを王戎にたずねると、王戎は答えて言った。「スモモの木は道ばたにあるのに実が多くなっています。これはきっと苦いスモモにちがいないでしょう。」

人	ジン／ニン・ <u>ひと</u>	○あるひと	ここでは不特定の人を指す。
問	ブン／モン・ <u>とふ</u> 【四段】	○たずねる	
答	タフ・ <u>こたふ</u> 【下二段】	○こたえる	
曰	エツ／ワチ・ <u>いふ／いはく</u> 【四段】	○いう	
在	サイ／ザイ・ <u>あり</u> 【ラ変】	○存在する	

「人間此、答曰」:

【漢語語法】①「之」は代名詞で上文の「唯戎不動」を指す。②「答曰」の主語は王戎である。

【訓読語法】①「之」は目的語を示す格助詞「を」を送って「これを」と訓読する。②「答ふ」は連用形に活用させて接続助詞「て」に接続する。「曰ふ」は終止形に読み、文末に語句の引用を表す格助詞「と」を送る。

「樹在道邊而多子」:

【漢語語法】①「在」は、「主語（人・物） || 在目的語（場所）」という構文になり、目的語には「於」などの前置詞を取らない。②「而」は、ここでは逆接の接続詞である。

【訓読語法】①「在」の目的語には場所を示す格助詞「に」を送る。②「而」は、上文で「在り」を已然形に活用させて逆説の接続助詞「ども」を送っており、ここでは不読とする。

「此必苦李」:

【漢語語法】①名詞述語文（判断文）である。②「此」は代名詞でスモモの実を指す。

【訓読語法】①名詞述語文の文末は断定の助動詞「なり」で結ぶが、ここではさらに推量の意味を加えるために意志・推量の助動詞「ん」を補って「ならん」と訓読する。②「此」は主語であるが、係助詞「は」や格助詞「が」は送らない。
 ○人之を問ふ、答へて曰ふ、樹道邊に在れども、子多し。此必ず苦李ならんと」

4 取一之、〈信〉然。

スモモを取ってみると、確かにそのとおりであった。

信 シン・まことに ○確かに
然 ゼン／ネン・しかり ○正しい そのとおりである

「取之、信然」：

【漢語語法】①「取之」の主語は上文の「人」であるが、ここでは省略されている。代名詞「之」はスモモの実を指す。②「然」は承認や判定を示す。他に同意や肯定的な回答を示すこともある。

【訓読語法】①「之」は目的語を示す格助詞「を」を送って「これを」と訓読する。また、偶然条件を表すため、已然形＋接続助詞「ば」の形で訓読する。②「然」の訓読み「しかり」は「しかあり」の縮約形であり、動詞で訓読する。

○「之を取れば、信に然り」



足利学校 孔子座像

「日本漢文」を読むための参考文献目録

「日本漢文」を理解する上で必要となる基本的な文献を紹介する。

日本漢文を読むための参考文献

1 概説書など

1-1 概説書

『変体漢文』（峰岸明 国語学叢書 11 東京堂出版 絶版）

＊唯一の「変体漢文」の概説書である。

『新版 古文書学入門』（佐藤進一 法政大学出版局）

＊日本古文書学の最新研究成果をふまえ、古文書例文の増補、名辞・語彙の補訂した 1971 年初版の改訂版である。

『概説古文書学 古代・中世編』（日本歴史学会編 吉川弘文館）

＊古代から中世にかけての様々な文書群を各専門家が最近の研究成果を簡潔・平易に解説している。

1-2 入門書

『入門 史料を読む 古代・中世』（小山田和夫 吉川弘文館）

＊日本古代史や中世史を考えていくために最低限必要である「史料」のうち、「古文書」「法制史料」「史籍」「日記・記録」について、その読解の方法（基本的な読み方や直訳的な意味の調べ方）を筆者自身がこれまで行ってきた経験的な学習方法を紹介しながら叙述したものでもある。

佐藤進一『新版 古文書学入門』のガイドブックにもなる。

『日本古代史を学ぶための漢文入門』（池田温編 吉川弘文館）

＊日本古代史を学ぶ上で不可欠な漢籍や漢文史料をどう解釈したらいいのか、第一線の研究者が読み方の基礎知識を平易に解説する。また、唐代を知る便利な書籍、異体字の問題、様々な漢籍の紹介や参考文献も収めた入門書である。

2 辞書

2-1 国語辞典

『日本国語大辞典』（小学館）

＊古代から現代に至るまでの日本語語彙を収録した日本最大の国語辞典である。

『国語大辞典』（尚学図書編 小学館 絶版 古書で 1000 円から入手可能）

＊『日本国語大辞典』を基礎として 25 万語を収録している。『日本国語大辞典』を持てない学生に有用である。

『時代別国語大辞典（上代編）（室町編）』（三省堂）

＊昭和 16 年に着手し、当初は「奈良・平安・鎌倉・室町・江戸」編の刊行を目指したが、戦争などの紆余曲折により変更し、昭和 42 年に上代編、昭和 60 年に室町編の第一巻を刊行して完結した。

『古語大辞典』（小学館）

＊5万5千語を収録する。語源・語義の変遷・文法的特質などを解説する語誌欄が便利である。

『角川古語大辞典』（角川書店）

＊上代から近世末までの日本古典文学作品から広く語彙を採録した古語大辞典。語義のほか、文学的・時代的・生活的意味、原点による用例を示す。巻頭に主要依拠本一覧がある。

2-2 漢和辞典

『大漢和辞典』（大修館 2000）

＊親文字 5 万字、熟語 50 万語。古今の辞書および『論語』『孟子』をはじめとする先秦の文献から唐宋の詩文、明清小説、歴代の史書などに至るまで、あらゆる資料を収録した日本最大の緩和辞典である。

『全訳漢辞海 第3版』（三省堂 2011）

＊収録親字数 1 万 2500。JIS 漢字第一水準～第四水準の 1 万 50 字をすべて収録し、伝統的な部首配列している。熟語数は八万、仏教語も含め、実際の用例を改めて精査し、文脈に即した訳語と出典を明示する。漢文学習上重要な古典から採録した漢文用例すべてに日本語訳に加え、書き下し文を明示する。最新の研究成果を取り入れた確かな字音情報、品詞別に配列した合理的な語義解説、深い理解を導く語義の補足説明、漢文の句法が分かりやすく学べる「句法」欄を備える。部首・音訓・総画索引に加え、検索に便利な「この部首の字」「他の部首の字」「句法一覧」を収録する。

2-3 日本史事典

『国史大辞典』（吉川弘文館）

＊総項目数 54000 余、日本歴史の全領域をおさめ、考古・民俗・宗教・美術・国語学・国文学・地理などの隣接分野からも必要項目をことごとく網羅した日本最大の歴史辞典である。

『角川日本史辞典新版』（朝尾直弘 角川書店）

＊原始・古代から 1990 年まで、高校生が学ぶ基礎的な重要語から学術用語までの用語 1 万 6 千項目を収録する。

2-4 その他の辞書

『古文書古記録語辞典』（阿部猛 東京堂出版）

＊古代・中世の古文書・古記録に表れる言葉の中から、制度・儀式・年中行事、社会生活上の言葉、女房詞、古文書・古記録に独特な用語など、約 9500 語を採録しその意味を平易に解説。時代による意味の変化にも言及した初めての古文書・古記録語辞典である。

『日本史年表・地図』（吉川弘文館）

＊図式日本史年表／日本史重要年表／年表／諸表／系図／文化勲章受章者一覧／

年号表

『例文仏教語大辞典』(石田瑞麿 小学館)

＊仏教書をはじめ、文学・歴史・日記・絵巻など、幅広い分野の文献から仏教用語を中心として約3万語を収録する。例文として、上代から近世までの諸文献から約4万5千を採録し、見出し語の五十音順に排列している。

『神道事典縮刷版』(国学院大学日本文化研究所編 弘文堂)

＊神道について体系だった解説をほどこし、個々の用語や概念を説明した事典である。付録として、神社一覧、神名一覧、文献一覧、年表がある。1994年刊行のものの縮刷版である。

3 文法書

3-1 古典中国語

『中国古典文法 改訂版』(太田辰夫 汲古書院 1984)

＊数少ない中国古典語文法書のひとつで、『論語』『孟子』『礼記』を資料に中国古典語を解説する。

『Outline of Classical Chinese Grammar』(Edwin G. Pulleyblank UBS PRESS 1995)

＊欧米に於ける代表的な中国古典語文法のひとつで、音韻学と文法学を統一的に考察しようとするところに本書の特徴がある。

『A New Practical Primer of Literary Chinese』(Paul Rouzer Harvard University Asia Center 2007)

＊最も新しい中国古典語のテキストブックであり、独学用としても優れている。

『改訂版 漢文語法の基礎』(濱口富士雄 東豊書店 2004)

＊『漢文読解の基礎』(2・2『全訳漢辞海 第3版』所収)は本書のダイジェスト版である。

『漢文文法と訓読処理—編訳『文言文法』—』(佐藤進・小方伴子編訳 二松学舎大学 21世紀COEプログラム 2006)

＊中国で最もスタンダードな文法書である『文言文法』を日本語に翻訳したものである。編訳者によって漢文訓読との関係について解説がある。

3-2 古典日本語

『Classical Japanese A Grammar』(Haruo Shirane Columbia University Press 2005)

＊欧米の日本古典学を学ぶ学生の多くが利用している、現在最もスタンダードな文法書である。

3-3 漢文訓読

『漢文を読むための助字小字典』(三浦勝利 内山書店 1996)

＊古典中国語の前置詞や助詞などについて、漢文訓読の立場から解説している。

『訓読のための日本語文法』(2・2『全訳漢辞海 第3版』所収)

* 日本古典語文法と訓読文法の相違点について解説したものである。

4 訓点資料

4-1 辞書

『訓点語彙集成』(築島裕 汲古書院 2009)

* 平安時代を中心に 600 に及ぶ訓点資料・音義類から集録した 20 万余の用例を和訓の五十音順に配列し、出典所在を明記する語彙集である。

『訓点語辞典』(吉田金彦ほか編 東京堂出版)

* 国語学の分野を超えて学際的にも飛躍してきた訓点語研究の成果を総覧し、その研究法を説く。平安時代・鎌倉時代の古訓点資料を中心とし、それに関連する文献等にわたり、現在の水準を、平易な表現により一般の読者の理解に資する目的で編集。訓点研究の概要・主要な訓点資料の解題・主な訓点語彙解説の3部よりなる。

4-2 入門

「訓点資料入門」「訓点資料入門 当日配付資料」(大槻信 奈良女子大学 21世紀 COE プログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」 2008 年度若手研究者支援プログラム)

ダウンロード

<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/1321>

* 訓点資料に関する基本的な書籍・論文はこの「訓点資料入門」および「訓点資料入門 当日配付資料」を参照されたい。



写真：江戸時代の藩校
日向飫肥 振徳堂

日本漢文学習のための検索サイト

1 画像テキスト

○早稲田大学

「古典籍総合データベース」

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>

○東京大学

「東洋文化研究所所蔵 漢籍善本全文映像資料庫」

<http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

○京都大学

「電子図書館 貴重資料画像」

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>

○九州大学

「九州大学デジタルアーカイブ」

<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/>

○筑波大学

「電子化資料」

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/rare.php>

○国立国会図書館

「近代デジタルライブラリー」

<http://kindai.ndl.go.jp/>

2 テキスト

○東京大学

「大正新脩大蔵経テキストデータベース」

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

○日本文学電子図書館

「J-TEXTS」

<http://www.j-texts.com/>

○東京大学史料編纂所

「全文の検索」

<http://www.ap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

3 所在目録

○国文学研究資料館

「日本古典籍総合目録データベース」

<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>

○京都大学

「全国漢籍データベース」

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>

○二松学舎大学

「日本漢文文献目録データベース」

<http://www.nishogakusha-kanbun.net/database/>

○東京大学史料編纂所

「史料の所在」

<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

4 論文検索

○NII 国立情報学研究所

「論文情報ナビゲータ CiNii Articles」

<http://ci.nii.ac.jp/>

○東北大学

「日本思想史文献データベース検索」

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/dojih/>

○国文学研究資料館

「国文学論文目録データベース」

<http://base1.nijl.ac.jp/~ronbun/>

○国立国語研究所

「国語学研究文献索引」

http://www6.ninjal.ac.jp/kokugogaku_bunken/